

終電を、逃した。

改札の向こうでシャッターの下りる音がして、私は駅前でしばらく呆然と突っ立っていた。仕事終わりの疲れきった頭では、その事実を飲み込むのにも時間がかかる。

(タクシーで帰ったら、いくらかかるんだろう……)

財布の中身を思い出して、げんなりする。今日はたまたま仕事のトラブルが重なって、いつもならあり得ないくらい遅い時間になってしまった。もう考えるのも億劫で、とにかくどこかで座りたかった。視界の端に、青白い看板が灯っていた。個室のネットカフェ。「朝までパックあります」の文字。

(……もう、そこでいいや)

夜に沈んだ街をふらふらと歩いて、私はそのビルの階段を上った。受付には、男性の店員が一人だけ立っていた。明るめの茶髪に、細身の体。私が扉を

押して入ると、その店員は接客用の顔で、けれどどこか自然に笑いかけてきた。

「いらっしゃいませー。あ、もしかして終電逃したんですか？」

図星を突かれて、私は少しだけ気まずくなる。

「……はい。恥ずかしながら」

「うわ、それきついっすね」

軽い口振りで笑いながら、店員は料金表を指でとんとんと叩いた。

若い。私より、いくつか下だろう。

「朝までいるなら、こっちのナイトパックのほうが安いですよ。ドリンクバーもついてるんで」

「じゃあ……それで、お願いします」

疲れているのが顔に出ていたのだろう。

店員は必要なこと以外はぺらぺら喋らず、それでいて手際よく手続きを進めてくれた。感じのいいバイト、という印象そのものだった。

「フラットシートの個室、五番になります。奥の突き当たりっす。ゆっくりしてってください」

胸元のネームプレートに、小さく「亜爽くん」と書いてあるのが見えた。

（あそう、って読むのかな）

どうでもいいことを考えながら、私は言われた通り奥の個室へ向かった。五番の個室は、思ったより狭かった。フラットに倒れるシートと、小さなモニター。扉を閉めると、外の物音がふっと遠くなる。私は靴を脱いで、座席に崩れ落ちるように座った。

（つかれた……。今日はもう、なんにも考えたくない）

モニターの電源を入れても、画面は真っ暗なまま反応しない。ケーブルを挿し直しても、うんともすんとも言わない。

（え、壊れてる……？）

仕方なく、私は座席横の内線ボタンを押した。ほどなくして、こんこん、と扉がノックされる。

「失礼しまーす。どうかされました？」

顔を出したのは、さっきの店員——亜爽くんだった。

「あの、モニターがつかなくて……」

「あー、この席たまにあるんですよ。ちょっと見ますね」

彼は狭い個室に身をかがめて入ってくると、モニター裏に手を伸ばした。

細身だと思っていたのに、こうして間近に立たれると意外と背が高い。頭を下げた首筋や、伸ばした腕が、思っていたよりずっと大きく見えた。

(……あれ、この子、こんなに大きかったっけ)

「はい、これで映るはずっす」

ぱっと画面が明るくなって、亜爽くんはこちらを振り返って笑った。

近い。狭い個室では、少し体を動かすだけで距離が近くなる。彼はまったくそれを気にしていないようだった。

「他に何かあったら、また呼んでくださいね」

そう言って、彼は出ていった。

私は映るようになったモニターをぼんやり眺めながら、なぜか胸のあたりがそわそわしていた。

(なに、今の。……疲れてるからかな)

しばらくして、今度は座席のリクライニングが途中で引っかかって、フラットに倒れない。

（うそでしょ、この席……）

再び内線を押すと、またあの声がした。

「はいはい、失礼しまーす。……あれ、また俺ですね」

亜爽くんは扉から顔を出して、少し可笑しそうに眉を上げた。

「今日、めっちゃ会いますね、俺ら」

「……なんか、すみません。この席、外れみたいで」

「いやいや、俺のシフト中でよかったっすよ」

彼はまた身をかがめて個室に入り、シートの下のレバーを探り始めた。

かちゃかちゃと金具を触る音。そのあいだ、彼の